

「女の人才」の称揚とその波紋

——18世紀後半イギリスにおける女性と創造力——

梅垣 千尋

<要旨>

18世紀後半のイギリスには、主に文芸の世界で活躍する「女の人才」(female genius)を称賛する書物が複数あらわれた。これらの書物は、ヨーロッパにおける「学識ある女性」賛美の伝統の輸入、18世紀半ばごろからの女性著述家の活躍の可視化、啓蒙思想における女性の知性への関心の高まり、文化的優越性を国内外に誇示する必要性などを背景として、イギリス社会にその確かな文化的基盤を獲得していた。18世紀後半のイギリスの男性知識人たちは、「女の人才」を全面的に否定するのではなく、むしろそれを歓迎する姿勢を示したが、同時にさまざまな限定をつけながら、「女の人才」を称賛する言説のなかに潜む、既存の性別秩序を揺るがす衝撃を緩和しようとした。またハナ・モア、メアリ・ウルストンクラフト、マライア・エッジワースといった女性著述家たちは、それぞれ異なるアプローチから「女の人才」を称賛する言説をとらえ返し、「女性であること」と「天才であること」の関係を独自に解釈しなおした。本稿は、こうした「女の人才」をめぐる言説のせめぎあいに注目することで、どのような女性がどの程度まで創造性を発揮してよいのかという問題をめぐって、18世紀後半のイギリスに多様な解釈の幅が生まれていたことを論じる。

キーワード：女性、天才、創造力、18世紀後半、イギリス

Keywords: women, genius, creativity, late 18th century, Britain

はじめに

本稿の目的は、18世紀後半のイギリスにみられた「女の人才」(female genius)をめぐる言説の分析をつうじて、女性に「創造力」があるとする議論がどのようにして生成・受容・再編されたのかを明らかにすることにある。「女性と創造力、女性の創造力」というテーマに切り込むにあたり、ここで「女の人才」という言葉に着目するのには二つの理由がある。第一に、現代の英語で「創造力」や「創造性」を意味する creativity や creative-ness という名詞は、18世紀のイギリスにはいまだ登場しておらず (OEDによれば、初出はそれぞれ1875年と1820年)、個人の創造的才能が論じられる場合には genius という単語が用いられることが多かったからである。たとえば18世紀には、ジョセフ・アディソン、アレクサンダー・ポープ、サミュエル・ジョンソンといった著名な文人がさかんにウィリアム・シェイクスピアを称賛し、その独創性の鍵を見いだそうとしたが、このとき用いら

れたのはもっぱら genius という言葉であった¹⁾。

第二の理由としては、18世紀後半のイギリスで出版された書物のなかに、female genius という言葉を用いて女性の文学的才能を論じたものが多く見いだせる点があげられる²⁾。端緒を開いたのは、1757年に出版されたジョン・ダンカム (John Duncombe, 1729-86) の『フェミニアード』(第二版) という詩である。これ以降、女性に genius があるという言説は、好意的に受けとめられる場合であれ、批判の対象とされる場合であれ、詩集、書簡集、随筆、小説、伝記などさまざまなジャンルの出版物に姿を現すことになった。もとより genius の意味そのものが18世紀にかけて変容しており、この言葉が芸術的な創造性を備えた「天才」という意味ではなく、あらゆる人間がもつ「才能」や「天分」というほどの広い意味で用いられる場合も少なくなかった。したがって female genius という言葉をつねに「女の天才」という意味で解釈することができるわけではないが、本稿ではむしろこうした揺らぎのなかに、女性が「創造力」をもつことをめぐる意味のせめぎあいが見いだせると考える。

さて、18世紀イギリスにおける「女性と天才」という問題を設定した場合、代表的な先行研究としてあげられるのが、1989年にクリスティーン・バタースビーが著した『性別と天才』であろう。このなかでバタースビーは、古代から現代にいたるまでの西洋世界の長い歴史を追いながら、「天才」という概念からいかに女性が排除されてきたのかをフェミニストの立場から解明した。やや長くなるが、本稿の議論の出発点を確認するためにも、以下ではまずこの著作の内容を要約しておきたい。

バタースビーによれば、「天才」(genius) という言葉には「ゲニウス」(GENIUS) と「インゲニウム」(INGENIUM) という二つの起源があった。「ゲニウス」とは、古代ローマの原始農業共同体において、家族や氏族の守護天使として崇拝された霊のことで、これは男性の生殖能力を神格化した概念であった。一方「インゲニウム」とは、芸術家が美を生みだすために必要な「器用さ」を意味する概念で、この言葉には本質的に「男性的」性格が刻印されていたわけではなかった。しかし、古代から影響力をもちづづけたガレノス医学は、女性を男性よりも不完全な存在として位置づけたため、ルネサンス期をつうじて女性は気質的に芸術を生みだすほどの力がなく、「インゲニウム」をもつ存在にはなりえないと考えられた。イギリスでは17世紀にこれら二つの概念が合流したかたちで「天才」という言葉が生まれ、いずれの系譜からも天才を男性のものとする発想が受け継がれた。しかし、やがて18世紀には天才の資質として、器用さや理性よりも感情や想像力と結びついた「独創性」が重視されるようになり、その結果、「天才」概念には新たに感受性の鋭さや自然にたいする受動性といった「女性的」要素が付与されることになった。こうした変化を受けて18世紀末からは、ふたたび別のレトリックによって「天才」概念からの女性排除が強化されていく。すなわち、女性の役割を家庭内に定めるドメスティック・イデオロギーが普及する一方、男女の神経機能の違いを強調する生理学的説明により、ヒステリーやメランコリーに陥りやすい女性はその身体的限界ゆえに創造的活動にはふさわしく

ないと論じられたのである。こうして19世紀になると、精神的には「女性的」特性を含みながらも身体的には男性であるという、普通の男性とはまったく異質なロマン主義的天才の理想像が生みだされることになったという³⁾。

こうしてバタースビーは、18世紀に微妙な意味の屈折があったことを認めつつ、結果的に天才は古代から現在にいたるまで一貫して、男性の生殖器をもつ者に限られてきたと論じた。扱われている対象の幅広さを考えれば、この作品は労作というほかない。また「女性と天才」をめぐる問題の概念史として、この著作が提示した見取り図はいまだにその有効性を失っていない。その後もこの著作を全面的に書き換える試みが行われていないゆえんであろう。しかしながら、18世紀という時代に限定して考えてみた場合、バタースビーの説明の仕方には若干の疑問がないわけではない。あえて印象論的にいえば、あまりにも歴史貫通的な「女性排除」という側面が強調されすぎて、「女性と天才」をめぐる議論が交わされた固有の歴史的文脈や個々の論者による意味の違いといったものが十分に検討されていないように思われるのである。

より具体的にいえば、次の三点のような疑問があげられる。第一に、18世紀後半にみられた「女の天才」を賛美する言説の扱い方についてである。バタースビーは、前述したダンカムの『フェミニアード』のような女性礼賛の詩にわずかに言及しているものの、それらを「ごく少数の例外」と片付けている。しかし後に詳しく見るように、18世紀後半には女性の知性や才能を讃える著作が多く出版され、「女性偉人伝」と呼ぶべきジャンルも形成されていた⁴⁾。「女の天才」を寿ぐ言説は、それほど簡単に考慮の対象から外すことができるようなものではなかったのではないだろうか。

第二点としてあげられるのは、女性を天才から排除しようとする言説のとらえ方である。たとえばバタースビーは、『独創的天才についての随筆』（1767年）の著者として知られる美学者のウィリアム・ダフ（William Duff, 1732-1815）が、『女性の知的および道徳的性格にかんする手紙』（1807年）のなかで、女性は創造的な文筆活動にたずさわるべきではないと論じた点に着目し、ここに新たな排除のレトリックを読み取っている。しかし見方を変えれば、こうした規範的な言説は、むしろその規範が守られていない状況が目の前にあるからこそ、現実の状況を変えるために発せられたとも考えられる。つまりダフのような議論は、実態として女性が「天才」を名乗りうるほどの状況が生まれていたことを、逆に裏付けるものとして理解することもできるのではないだろうか。

第三の点は、「女性と天才」をめぐる議論がいかに受容されたのかという問題にかかわるものである。バタースビーは主として概念の歴史に焦点を絞っているためやむをえない面もあるが、当事者であった女性たちの反応については、もう少し細かい分析があつてしるべきであろう。たとえ「女の天才」を称揚する言説が強力なヘゲモニーを握らなかったとしても、その言説は女性たちを深いところで励ますものになりえたかもしれない。また、たとえ「天才」概念のなかに女性排除の傾向が見られたとしても、当時の女性たちはこうした傾向にたいし、ある意味ではしたたかに対処していたかもしれない。いわば概念

の「外側」に目を転じることで、「女性と天才」をめぐる問題にはまた別の光を当てることができるのではないだろうか。

以上のような問題意識から、本稿では18世紀末のイギリスにおける「女の天才」の称賛とその波紋について、マイナーなものを含むいくつかの出版物を利用しながら詳しく検討してみたい。以下ではまず第1節で、「女の天才」を称揚する言説がどのようにして生まれたのかを考察し、第2節では、こうした言説の衝撃が男性知識人たちによってどのように受けとめられたのか、また続く第3節では、女性著述家たちが「女の天才」をめぐる議論をどのようにとらえ返したのかを明らかにする。

第1節 「女の天才」を称揚する

すでに述べたように、18世紀後半のイギリスには、もっぱら文学の世界で活躍する「女の天才」を賛美する書物がいくつか登場した。ここでは、それらの代表的作品の内容を確認するとともに、あわせて女性の知性や能力を称賛する主旨で刊行された同時代の出版物を取り上げ、より広い文化的背景のなかに「女の天才」を称賛する言説を位置づけることにしよう。

「女性偉人伝」というジャンル

イギリスにおける「女の天才」礼賛の伝統は、1757年に発表されたダンカムの詩『フェミニアード』（第二版）を嚆矢とするが、学識ある女性の称揚を目的とした書物は、すでにその数年前に出版されていた。ジョージ・バラード（George Ballard, 1705/06-55）がまとめた『グレート・ブリテンの女性たちの伝記』（1752年）がそれである。副題が示すように、この書物の目的は「言語、芸術、学問」において優れた女性たちを掘り起こし、その生涯を記録することにあった。序文によれば、イタリアなどの諸外国には学識ある女性の功績を讃える書物があるが、イングランドではそうした試みが行われず、「この国のたいへん多くの才能溢れる（ingenious）女性たち」は、公に知られていないばかりか、伝記作家たちによっても看過されてきた。しかし、「イングランド人はヨーロッパのどの国よりも多く、文学的素養を身につけた女性を生みだしてきた」のであり、そのことを人びとに知らしめなければならない⁵⁾。こうした使命感に駆り立てられて、バラードは主に15世紀から16世紀にかけて活躍したイギリスの女性たちの情報を丹念に集め、「ノリッジの隠遁者、ジュリアナ」（Juliana, Anchorite of Norwich）からはじまる62名の伝記を年代順に収録した。

このような手法に反映されるように、バラードはもともとローマ時代のコイン収集に没頭していたアマチュアの古事物研究者であったが、その研究の業績を評価され、44歳のときオクスフォード大学モードリン・カレッジへの入学を認められていた。序文によれば、『グレート・ブリテンの女性たちの伝記』は、カレッジ在学中、友人だったパリー氏と、

オクスフォード大学セント・メアリ・カレッジのラッセル氏という二人の男性の協力を得て執筆されたものであるという。この伝記集が周囲の人びとの支持を受けていたことは確かなようで、冒頭の予約購読者リストには、オクスフォード大学関係者を中心に合計400人の名前が載っている（そのなかには当時モードリン・カレッジに在籍していたエドワード・ギボンの名前も見いだせる）。さらに、この400名のなかに143名もの女性が含まれていることや、この書物が女性著述家タルボット夫人（Catherine Talbot, 1721-70）に捧げられていることから、この伝記集が当時の女性たちとの深い関わりのおかげで上梓された様子がうかがえよう。

バラードの伝記集では *genius* という言葉があまり前面に出されることがなかったが、ダンカムの『フェミニアード』（初版は1754年）は、版を重ねた1757年、新たに *female genius* という副題をつけて発表された。ダンカムはケンブリッジ大学コーパス・クリスティ・カレッジを卒業した後、国教会牧師となり、同カレッジのフェローにも任命された人物であった。頌詩という形態をとったこの作品は、バラードの書物のように詳しい情報を盛り込むよりも、むしろイギリスの文学的才能をもつ女性たちを一つの流れにまとめ、その切れ目のない豊かな伝統を賛美することに力点が置かれている。また対象とされる女性も、バラードのものとはやや趣きが異なる。この作品でダンカムは、内戦期に生きたキャサリン・フィリップス（Katherine Philips, 1631-64）に始まる20人ほどの女性を取り上げているが、このなかにはエリザベス・カーター（Elizabeth Carter, 1717-1806）、フランシス・ブルック（Frances Brooke, 1724-89）、エリザベス・ペニンントン（Elizabeth Pennington, 1734-59）といった、当時の活躍中の女性たちが含まれていたからである⁶⁾。ダンカムは文筆家であった父親をつうじて、こうした同時代の女性著述家の動きをかなり詳しく把握していたようである。『フェミニアード』には、父親の友人だった画家ジョセフ・ハイモアの娘であるスザンナ・ハイモア（Susanna Highmore, 1725-1812）も取り上げられ、彼女の未刊行の原稿にまで賛辞が寄せられているが、スザンナはこの詩が書かれた数年後、ダンカムの結婚相手となる女性であった。

ダンカムの『フェミニアード』は、*female genius* という言葉を副題に掲げてはいたものの、本文では *genius* を「才能」(talents) や「能力」(abilities) に近い意味で用い、また才能豊かな女性たちを男性に匹敵する存在と位置づけていたわけでもなかった。これにたいし、1766年に匿名で出版された二巻本の伝記集『ビオグラフィウム・ファエミネウム』には、さらに踏み込んだ主張が含まれていた。副題のとおり、「雅量、学識、天才、徳、信仰心、その他の素晴らしい資質ゆえに卓越した」女性たちを合計194人も取り上げたこの伝記集は、バラードやダンカムの作品とは異なり、イギリスだけでなく古代以降の西洋世界を中心とした外国の女性たちの伝記も収録し、それらをアルファベット順に配置している。こうした形式的な整備以上に注目されるのは、序文で筆者が「魂には性差がない。それと同じように機知、天才 (*genius*)、その他の知的能力にも性差はない」と断言している点である⁷⁾。それによれば、女性是一般に教育によって狭い領域に関心が閉ざされて

きたが、1～2世紀前のイギリスには、言語や科学や哲学の分野で優れた力を発揮した女性たちが確実に存在した。『ビオグラフィウム・ファエミネウム』が書かれたのは、この事実を証明するためであり、過去の女性たちの実例からは、「知恵や天才（genius）や能力が男女とも同じもので、それぞれ同じようにキラキラと輝いている」ことがわかるという⁸⁾。伝記集という形態ゆえに、対象からは生存中の女性たちが除外されていたが、天才における男女平等という命題は、「女の天才」礼賛という伝統に新たな意味を付け加えるものであったといつてよい。

さらに1774年には、この伝統を女性の立場から継承する作品が登場した。メアリ・スコット（Mary Scott, 1751/2-93）が著した『フィーメール・アドヴォケイト』という頌詩である。「ある女性へ」と題された書簡形式の前書きによれば、あるときスコットは友人の女性とともにダンカムの『フェミニアード』を「楽しんで」読んでいたが、このなかに取り上げられた「女の天才たち（Female Geniuses）」があまりに少ないことを残念に思い、『フィーメール・アドヴォケイト』の執筆を思い立ったという⁹⁾。確かにスコットはこの詩のなかで、ダンカムが対象にしなかった30名ほどの女性たちを、ヘンリ 8 世の最後の妻キャサリン・パー（Catherine Parr, 1512-48）を筆頭に時代順で登場させ、エリザベス・モンタギュ（Elizabeth Montagu, 1720-1800）、キャサリン・マコーリ（Catherine Macaulay, 1731-91）、アナ・バーボールド（Anna Laetitia Barbauld, 1743-1825）といった同時代の女性著述家たちにも惜しめない賛辞を寄せていた。

このようにダンカムの『フェミニアード』の不足部分を補おうとする姿勢の背後には、スコット自身の女性としての使命感もあったのだろう。前書き部分でスコットは、大部分の男性がまだ十分に女子教育の改善の必要性を認識していないことにたいする「憤り」さえ表明している¹⁰⁾。あるいは当時のスコットが、やがて夫となるジョン・テイラーをつうじて、女子教育に熱心な非国教徒たち（のちのユニテリアン）と結んだ親交からの影響を指摘することもできるかもしれない。いずれにせよ重要なのは、スコットが『フィーメール・アドヴォケイト』のなかで、「女の天才」を明らかに男性の天才と同格になりうる存在としてとらえている点である。この詩の最後に近い部分でスコットは、男性が自分たちの知識や学問のみを「正当なもの」として玉座に祭り上げていることに異議を唱えて、次のように女性の知性が輝く将来像を描きだした。「ある者は道徳に、ある者は歴史書に目を向け／また別の者はシェイクスピアの熱情で燃え上がる！／比類なきニュートンとともに、ある者はいまや天高く舞い上がり／天の限りない驚異のなかに消えていく」¹¹⁾。こうしてスコットは、「女の天才」がシェイクスピアやニュートンと肩を並べてその才能を羽ばたかせる姿を堂々と謳いあげたのである。

「女の天才」を称揚する議論の背景

さて、ここまでは四点の書物を紹介しながら、18世紀後半のイギリスにみられた「女の天才」を称揚する言説を跡づけてきた。では、もう少し広い文脈でとらえた場合、こうし

た言説はどのような背景のもとで成り立ったと考えられるだろうか。四つの側面から指摘してみたい。

まず指摘できるのは、ブルタルコス以来の西洋世界における「学識ある女性」賛美の伝統である。バラードが『グレート・ブリテンの女性たちの伝記』を執筆した経緯からもわかるように、大陸ヨーロッパでは女性の歴史にかんする書物がすでに多く見られ、それらの情報は18世紀のイギリスにも届けられていた。1770年代前後には、それらがさかんに英語に翻訳された様子も確認できる。たとえば、フランスのアントワヌ＝レオナル・トマが著した『さまざまな時代の女性の性格、マナー、能力 (genius) についての随筆』は、ウィリアム・ラッセル (William Russell, 1746-93) とジェマイマ・キンダーズレ (Jemima Kindersley, 1741-1809) によってそれぞれ異なる訳で1773年と1781年に出版された¹²⁾。また1774年にはスペインのベニト・ヘロニモ・フェイホーによる『女性の学識、才能 (genius)、能力についての随筆』の英語版も刊行された¹³⁾。18世紀半ば以降のイギリスでは、それまでの遅れを取り戻すかのように、ヨーロッパ大陸からの女性論の輸入が進んでいたのである。

また当然のことながら、18世紀半ばごろからまとまった数の女性文人の活躍が目に見えるものとなったことも背景の一部だろう。これまで名前のあがった女性のなかでも、たとえばエリザベス・カーターは1758年にストア派エピクテートの翻訳全集を出版し、エリザベス・モンタギューは1769年にヴォルテール批判を含むシェークスピア論を著して、女性にも優れた知性があることを人びとに印象づけた¹⁴⁾。この二人を中心として、18世紀半ばのロンドンにつくられた「ブルーストッキング」という女性の文芸サークルは、男性知識人にとっても無視できないものになっていた。このサークルには属さなかったものの、共和主義の立場から全8巻にも及ぶ大著『イングランド史』(1763-83年)を執筆したキャサリン・マコーリの活躍もまた、同時代人の目を引いた¹⁵⁾。画家のリチャード・サミュエルが1779年に発表した「グレート・ブリテンの当代の九女神」という絵画に映しだされているように、こうした女性たちの存在は当時、ギリシャ神話になぞらえられるほど輝かしいものと受けとめられていたのである¹⁶⁾。

さらに三点目として、いわゆる「啓蒙の世紀」を特徴づけたいくつかの思想潮流の影響も指摘しなければならない。バタースビーの議論の要約をした際にも少し触れたように、18世紀のイギリスでは、商業社会が進展するなかで「感受性の鋭さ」や「社交性」、あるいは「マナーの洗練」に価値を置く新たな思潮が生まれ、これらの価値を体現するとされた女性にたいする肯定的評価の基盤がつくられた¹⁷⁾。またジョン・ロック以来の観念連合説により、精神的な性差が教育の産物であるという理解が広がり、非国教徒をはじめとする進歩的知識人たちのあいだで、女子教育の改善にたいする関心が高まった。さらに1770年代からは、ジョン・ミラーやケイムズ卿といったスコットランド啓蒙の担い手を中心に、野蛮から文明へと向かう社会進歩の過程で、次第に女性の地位が高くなるとする歴史観も浸透していった¹⁸⁾。スコットは『フィーメール・アドヴォケート』のなかで、女性が

知識を享受することを阻まれている状態は「きわめて野蛮」であると論じているが、ここには女性の置かれた状態を基準にして、社会進歩の度合いを図ろうとする発想が読みとれよう¹⁹⁾。これらの思想動向のもと、18世紀のイギリスでは、女性の知性の開花によって社会全体にもたらされる利益の大きさが認識されるようになっていたのである。

最後に四点目として、イギリスの文化的優越性を示そうとする思惑についても言及しておきたい。バラードによる『グレート・ブリテンの女性たちの伝記』の序文からは、国内の優れた女性たちの存在が、しばしば国家の誇りとしてとらえられていたことがうかがえる。その背景にあったのは、ヨーロッパにおける対外的緊張の高まりだろう。イギリスは1756年から63年まで続いた七年戦争でフランスに圧勝すると、事実上、世界貿易の覇権を握った。経済的優位を確立したイギリスにとって、ヨーロッパの宮廷文化をリードしていたフランスを文化的に乗り越えることは、次の大きな課題として強く意識されたはずである。フランス通の文筆家ジョン・アンドリュース (John Andrews, 1736?-1809) は1785年に出版した『貴婦人にかんする対話』のなかで、フランスの女性著述家の才能を称えながら、過去はともかく「特に目下この時代」、イングランドが優れた女性を「かつてなく」輩出していることを強調した²⁰⁾。こうした主張からも読みとれるように、「学識ある女性」の表象は、フランスと同程度、あるいはそれ以上のイギリスの文明発展を国内外に誇示するための「ショーケース」として機能したのである。

これらの背景が互いに連動した結果として生まれたのが、「女性偉人伝」というジャンルであった。その意味で「女の天才」を称揚する言説は、少なくとも1750年代から1770年代にかけてのイギリス社会では、単に「例外的」な位置を占めていたわけではなく、その文化的基盤をしっかりと獲得していたと考えることができる。1752年に出版されたバラードの『グレート・ブリテンの女性たちの伝記』が1775年に再版されていたことは、その事実を裏づけるものだろう。さらに1791年には、『フェミニアード』や『フィーメール・アドヴォケイト』の形式を受け継いで、「女の天才」という言葉をもとにした『フィーメール・ジェニアード』という頌詩も出版された²¹⁾。その作者エリザベス・ベンジャー (Elizabeth Benger, 1775-1827) がこのとき13歳という若さであったことは、周囲にこうしたテーマでの詩作を「好ましい」ものとして若い女性に促す環境があったことを意味する。このように18世紀後半のイギリスにおいて、「女の天才」を称揚することはタブーでも逸脱でもなく、そこには確かに時代の追い風が吹いていたのである。

第2節 「女の天才」の衝撃を緩和する——男性知識人たちの反応

それでは、このような「女の天才」を賛美する言説はどのように受けとめられたのだろうか。男性による典型的な拒否反応の例は、フランスの思想家ジャン・ジャック＝ルソーに見ることができる。彼は『ダランベールへの手紙』(1758年)のなかで、女性を楽しむために書かれた書物を批判しながら、脚注で次のように述べた。

女性は一般的にどんな芸術も好まず、どんな芸術にも向いておらず、また何の天才 (genius) ももたない。女性は軽妙な才気、繊細な趣味、あるいはいくらかの哲学や論理しか必要としないちょっとした仕事には成功するかもしれない。学問、博識、文学、そして労力を注いで獲得されるすべてのものを身につけることができるかもしれない。しかし魂を熱し、燃え立たせるあの天上の炎、すべてを焼き尽くし、貪りつくすあの天才 (genius)、燃え上がる雄弁、その陶醉を人びとの心の底にまで伝える崇高な感激、それらは女性作家の作品にはいつも欠けていることだろう。女性を書いたものは、女性と同じように、熱のない、かわいらしいものばかりだ²²⁾。

ルソーにとって芸術とは、「魂を燃え立たせ」「すべてを焼き尽くす」ような激しい営みであり、女性にはそうした創作活動に耐えうるだけの熱情が欠けていた。ルソーが男女の性格や活動領域をまったく対称的なものとしてとらえていたことはよく知られているが、この引用文にはそうした発想がはっきりと読みとれる。ルソーは「女の天才」を称揚する言説のなかに、あるべき男女の区別や序列を攪乱する危険な要素があることをいち早く嗅ぎ取っていたのである。

『グランペールへの手紙』は、イギリスでは原著が出されて間もなく1759年に英語の翻訳が出版された。だが興味深いことに、18世紀後半のイギリスの男性知識人の著した書物には、女性に天才がないと断定するルソーのような議論はほとんど姿を見せなかった。むしろ多くの男性知識人は、「女の天才」を表面的には称賛する姿勢を示しながら、同時にきわめて微妙な論調で、こうした言説のなかに孕まれた「不穏な」要素を取り去ろうとしたように見える。では、それはどのような議論だったのか。以下ではその内容を具体的に検討していこう。

「天才」の意味の希薄化

「女の天才」を称揚する言説から、既存の男女の序列関係を脅かす力を取り除くためのひとつの方法は、「天才」の意味そのものを「穏当な」ものに解釈し直すことであった。そもそもダンカムの『フェミニアード』にも見られたように、優れた女性を称賛する書物のなかには、geniusを「才能」や「能力」といった言葉と互換可能なものとして用いた例が少なくなかった。どれほど意図的であったかはともかく、このような意味でgeniusという言葉が使われ続けるかぎり、female geniusという言葉からは、たとえばスコットが『フィーメール・アドヴォケート』で描いたような、男性の天才に匹敵する女性像が想起される危険は生まれなかったことだろう。

こうしたgeniusの使い方が見られる代表的な例としてあげられるのが、ジェームズ・フォードイス (James Fordyce, 1720-96) の書物である。フォードイスはスコットランド出身の長老派教会の聖職者で、もっぱら宗教的および道徳的な観点から、女性にたいして「女性的」な領域や行動を守り、家庭のなかで慎み深く控えめに振舞うことを説いた。彼

が自分の説教をもとに1765年に著した『若い女性への講話』は、1800年までには12版を重ねるベストセラーとなり、当時の若い女性たちの本棚を長いあいだ占めたといわれる。このなかの「家庭的で上品なたしなみを伴った女性の徳について」と題された講話のなかで、フォーダイスは若い女性にたいし、次のように刺繍の仕事を推奨した。

針で濃淡をつける仕事は……確実に特別の注意を払うに値する。この方法によって色彩の配置や調和や混合を行うことは、女性の天分 (female genius) にとってもっとも素晴らしい練習となり、また想像しうるなかでもっとも楽しいものとなる²³⁾。

ここでは刺繍が「女性の天分」を発揮するにふさわしい仕事として位置づけられている。フォーダイスは刺繍のほか、絵を描くことや音楽を奏でることも女性に薦めたが、これらはすべて家族を楽しませ、優雅さや調和の精神を学ぶ手がかりとなり、また美しい天国の世界にむけた準備として役立つからであった。この引用文のなかには、「色彩の配置や調和や混合」といった創造的な芸術活動に連なる要素が含まれているため、ここでの genius には、それを「天才」という意味で解釈する余地が残されているようにも見えるかもしれない。しかし、その活動領域が家庭内に限定されている以上、「女の天才」は特殊女性的なものに固定され、男性の「天才」と同格な地位を求めることは許されなかった。こうしてフォーダイスは、女性が創造的な「天才」をもつことを暗示しつつも、その才能を男性とは異なった芸術表現に向かう「女性の天分」として囲い込むという、巧みなレトリックを用いていたのである。

フォーダイスとは異なり、明確に「天才」というニュアンスで genius という言葉を使いながら、これを女性がもつことの意味そのものを希薄化する議論もあった。こうした議論の一例は、マーティン・シャーロック (Martin Sherlock, 1747?-97) が1781年に発表した『さまざまな主題にかんする手紙』の一書簡に見いだすことができる。アイルランド出身のシャーロックは、第4代ブリストル伯爵の援助を受けて1770年代後半にドイツ、スイス、イタリアを旅行した人物で、その書簡集はジェノヴァやパリでもフランス語で出版されていた。こうした豊かなヨーロッパ体験をもとに書かれた手紙のなかで、シャーロックは次のように問題を提起している。

女性には天才があるか？ 私はあると思う。そして私の意見を裏付けるために、フランスとイングランドの両国に生きている何人かの名前をあげることができる。しかし天才とは何なのか、はっきりした考え方をもち努力をしてみよう。……天才とは、発明 (Invention) の別名である。何でもよいから新しいものを創造すれば、その創造は天才の仕事となる。……天才の種類は、その濃淡と同じくらいに無限なのである²⁴⁾。

このようにシャーロックは、まず「女性には天才がある」と断言する。シャーロックがフ

ランス語で出版した書簡集は1780年にジョン・ダンカムによって英語に翻訳されていたため、もしかするとシャーロックはダンカムとの関わりをつうじて「女の天才」をめぐる議論を知っていたのかもしれない。しかしいずれにせよ、シャーロックはこう断言した上で、天才とは「発明の別名」にすぎず、「何でもよいから新しいものを創造すれば」、それは天才の仕事になると論じる。こうして定義を拡大することで、この議論は天才の特権性を消し去り、それをあらゆる人びとに開かれたものとしてとらえる道筋をつくることになった。ここまで垣根が取り払われれば、確かに女性が天才をもつことには何の障害もなくなるだろう。しかし、同時にそれは実質的に、「天才」を一般的な「才能」というほどの意味でとらえる議論に近づくものでもあった。「天才の種類」が「無限」であるとは、すなわち、創造性の度合いを問わず誰にたいしても「天才」を認めることにほかならないからである。こうしてシャーロックの議論は、女性に天才があると主張しながらも、「天才」を相対主義的にとらえることで、結果的に「女の天才」が本来もつはずの価値を低める効果をもたざるをえなかったといえよう。

「女の天才」の例外化

このように「天才」の意味を希薄化する議論とは異なるパターンもある。一部の「女の天才」を称揚する態度を示しながら、目の前の女性にたいして、それがいかに「例外的」な存在かを教える論とする議論である。1784年に匿名で出版された『文通——書簡からなる独創的な小説』という書簡体小説は、「女の天才」を称揚する言説のまわりに、幾重にも警戒の網が張り巡らされていた様子をよく映しだしている。引用がやや長くなるが、まずはこの小説のなかで、ある女性が文通相手の男性に送った次の手紙から見ていくことにしよう。

ところで、あなたは『エミリ・モンタギュ』をお読みにになったことがございますか？……ブルック夫人の書物一般についてのあなたのご意見をうかがえるかと思ってお聞きいたします。私は女性の能力について、ある種のうぬぼれを抱いており（そして、それが許しがたいことではなければ良いと思っています）、女の天才（female genius）の努力が成功をおさめているのを見るたびに満足しております。あなたは今のところ、私がこうした奇想天外な誇りを抱いていることをお笑いになるでしょうが、私は実際に、イングランドにおける文学の状態が、エリザベスやアンの治世においては決してこれほど榮えていなかったという考えが勝利をおさめたことを喜んでいるのです。……相対的に見て、一方の性の優れた作家たちとほとんど同じくらい多くの作家たちが他方の性に現在みられないかどうか、あなたにお聞きしたいと思います。ブルック、グリフィス、マコーリ、カーター、モンタギュなどなど。最後の二人の存在は、長いあいだ私のなかで確固としたものとなっていますが、それはこの二人があなたからの称賛という名誉ある印を得てきたからです。全体的に見て、私たちは

あなたがたの榮譽をともに分かち合うチャンスをいくらかでも持っていないのでしょうか？²⁵⁾

こうして書き手の女性は、「女の天才の努力が成功をおさめている」ことに「誇り」を抱き、女性にも男性の優れた作家たちと同じ榮譽が授けられてよいのではないかと問いかける。こう考える根拠としてあげられているのは、この手紙の送り先である男性が、かつてエリザベス・カーターやエリザベス・モンタギュに「称賛という名誉ある印」を与えたという事実である。この手紙にたいして、男性の文通相手はさしあたり次のような返事を送っている。

いかにも、私は『エミリ・モンタギュ』を読んだことがあり、それをたいへん楽しみました。ブルック夫人はもっとも才能ある (ingenious) 女性です。彼女の作品は……人生とマナーについての愛すべき興味深い描写であって、その像は絶対的に完全なものではないにせよ、慈愛に満ちたペンで素描され、洗練された感情の繊細な彩色でうっすらと染められています²⁶⁾。

「ブルック夫人」とは、前述のとおりダンカムの『フェミニアード』で取り上げられた女性小説家、フランシス・ブルックのことである。この男性はブルックが1769年に著した『エミリ・モンタギュの物語』の感想を求められ、その才能を高く評価しているかのようである。しかし注目すべきなのは、ここで選ばれた称賛の語彙だろう。「愛すべき (amiable)」描写、「慈愛 (benevolence) に満ちたペン」、あるいは「洗練された感情のデリケートな彩色」、これらはいずれも「女性的」な価値にたいする典型的な賛辞にほかならない。この男性は、女性らしい天才としてのブルックの作品を「楽しんで」読んだというわけである。続けてこの男性は次のように述べる。

比較にかんするあなたの質問に答えることは控えて、私はあなたが名前をあげた女性たちやそのほかの数名の女性たちが、私たちの榮譽 (laurels) のうちのいくらかを刈り取るのに十分であるらしいと認めましょう。私は彼女たちの存在がしかるべき励みになることを願っています。しかしあなたがた女性は、文芸の助けがなくとも十分に侮りがたい存在です。そして、もしあなたがたが私たちの領域をあまりにも侵食してしまえば、その結果は危険なものとなるかもしれません²⁷⁾。

ここで書き手の男性は、男女の著述家の優劣を論じることは避けながら、優れた女性著述家たちが「私たちの榮譽のうちのいくらか」を主張することを認めている。しかしその強調点は、むしろ一般の女性がこうした「榮譽」を求めることへの警告に置かれているといつてよい。一方で、女性にはこうした文学的才能がなくとも十分に存在意義があると持

ち上げながら、他方で、女性が「私たちの領域」を「侵食」することによる「危険」な結果をほのめかす。こうしたレトリックには、いわば「飴と鞭」の手法で読み手の女性を懐柔しようとする意図が映しだされているように思われる。この男性はさらに女性歴史家、キャサリン・マコーリにたいしても次のような複雑な評価の仕方をしている。

あなたはマコーリ夫人の話題を出されました。彼女はある種の驚異 (prodigy) です。私は彼女の能力を尊敬します。……彼女の鑑賞力には、あまねく賞賛が与えられることを喜びましょう。彼女を記念して像を建てたいくらいです。そして、天才が片方の性にのみ限られていないことの証明として、いつの時代にも一度は、彼女のような女性が登場することを願うでしょう。……しかしそれと同時に、あなたはこう申し上げても許してくださるでしょうが、私たちは一人以上のマコーリ夫人を望んではおりません²⁸⁾。

つまりこの男性は、「天才が片方の性にのみ限られていないことの証明」として、マコーリのような非凡な「女の天才」が登場することを寿ぎながらも、そうした「女の天才」は一時代のなかで一度だけ、また一人だけで十分であると述べる。この男性はこうした主張が、手紙の送り先である相手の女性の気分を害するおそれがあることに気づきながら、さらに次のように続ける。

友よ、この表現についてはあなたに弁明いたしません。この表現は女性の能力をけなすことにはなりませんし、一般的にいて、それぞれの性は神の摂理によって特に割り当てられた領域でもっとも多くの利益を得られることを、あなたは認めなければなりません²⁹⁾。

結局、この男性がもっとも伝えたかったのは、男女にはそれぞれ異なる活動領域が割り当てられており、女性は男性と同じ領域でその能力を発揮しようとすれば利益が得られないという、きわめてルソー的、あるいはフォードイス的な主張であったということになるだろう。ここまで読むと、実のところ彼が本当に「女の天才」を称賛する気があったかどうかさえ疑わしくなるかもしれない。

この匿名の小説の来歴について詳しいことはわかっておらず、作者が書き手の女性と男性のうち、どちらの立場を支持していたのかは全体としてつかみにくい。だがいずれにせよ、この男性の書き手に見られるような「女の天才」の受けとめ方は、当時のイギリスの男性知識人のなかではかなり一般的なものであったように思われる。マンチェスタのセント・メアリ教区教会で牧師補を務めていた無名の著述家ジョン・ベネットは、1787年に『女子教育批判』という書物を著し、そのなかで「女の天才」について次のように述べた。

私はグレアムという人の名声や、カーターという人の知識を否定したいとは思わないし、シーワードという人の神殿からたった一枚の、自分の力で勝ち得た栄誉 (laur-el) を引き抜こうとは思わない。しかし女の天才 (female genius) の驚異 (prod-igies) は、女性の能力の一般的な状態や、女性の理解力の通常の水準を一切指し示すものではない。それと同時に私が聞きたいのは、こうした教養ある少数の一人にたいして、それとは反対の無知無学な何千もの人びとがいらないのかということだ³⁰⁾。

ここで述べられている「グレアムという人」とは、再婚後のキャサリン・マコーリのこと、そして「シーワードという人」とは、女性詩人アナ・シーワード (Anna Seward, 1747-1809) のことである。ベネットはさしあたり、彼女たちの価値を否定しようとはしない。しかし書簡体小説『文通』に登場した男性の書き手と同じように、ここでも「女の天才」は通常其自然法則を覆す「驚異 (prodigy)」という言葉で表現されている。「女の天才」はごくわずかな例外であり、女性一般の能力の状態とはまったく無関係だというのである。ベネットはこうして「無知無学な何千もの」女性への注目を促し、女性にたいする宗教教育のさらなる必要性を説いていくが、しかし考えてみれば、男性の場合であっても「天才」とはつねに例外的存在であって当然のはずである。ことさら女性の場合にのみ「天才」とそれ以外の人びとのあいだの違いを強調するベネットの議論は、「女の天才」を称賛する言説にたいする警戒の強さを物語るものだろう。

このように18世紀後半のイギリスの男性知識人たちの多くは、「女の天才」を称揚する言説を正面から攻撃することは避け、その代わりにさまざまな細かいレトリックや言葉の操作を行って、この言説のなかに潜む、既存の性別秩序を揺るがす衝撃を緩和しようとした。女性の知性はより良く改善されるべきであり、ある程度の「女の天才」は称賛されてよいが、しかし同時代の女性たちが男性と同じような天才をみずからこぞって主張しようとするならば、その芽は早めに摘み取られなければならないのである。

第3節 「女の天才」の罨をかいくぐる——女性著述家たちの反応

それでは、18世紀後半のイギリスの女性著述家たちは、「女の天才」を称揚する言説をどのようにとらえ返したのだろうか。先述の書簡体小説『文通』に登場した女性の書き手のように、同性の著述家たちが「天才」として賛美される様子は、少なくない女性たちに自信をもたせ、自分の能力の可能性を追求する勇気を与えたことだろう。しかし前節で見たように、その自信や勇気が女性の社会的役割からの逸脱を引き起こす危険性は、さまざまな言説によってあらかじめ封じ込まれていた。男女の序列がすでに確立された社会のなかで、みずから「天才」を名乗ることがあまりにも大胆な企てであることは、多くの女性に十分すぎるほど理解されていたにちがいない。第1節で言及したエリザベス・ベンジャーは、『フィーメール・ジェニアード』の序文で、「女の天才」を寿ぐという作品の主

旨にもかかわらず、自分自身の「不完全さ」や「弱さ」や「無知」を繰り返し強調している³¹⁾。

このような状況のもと、「女の天才」を称揚する言説は、いわば女性著述家にとって「罨」になりうるものであったといつてよい。その言説によって文筆の世界に入るよう背中を押されながらも、もし不用意なかたちで「女の天才」を賛美すれば、「女性であること」の価値を傷つける恐れや、「天才であること」の価値を引き下げる恐れがあったからである。この言説を自分自身にたいして、あるいは女性読者にむけてどのようなメッセージとして解釈しなおすかという問題は、みずからの存在意義にも関わる重大な態度表明を女性著述家に迫るものであった。

では、18世紀後半の女性著述家たちはこの「罨」をどのようにかいくぐろうとしたのだろうか。以下ではハナ・モア (Hannah More, 1745-1833)、メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97)、マライア・エッジワース (Maria Edgeworth, 1768-1849) という、互いにタイプの異なる三人の女性に的を絞り、それぞれが「女性であること」と「天才であること」をどのように結びつけて論じたのかを考察してみたい。

「女の天分」と「女の天才」——ハナ・モア

ハナ・モアは、三人の女性のなかでもっとも保守的な立場に分類される女性である。彼女は1780年代に回心を遂げてから、英国国教会福音主義派の熱心な信仰者となったが、それ以前の1770年代には、悲劇『パーシー』(1777年)を成功させるなど、ロンドンの文学・演劇サークルで華々しく活躍していた。そのころの彼女はまさに周囲から「女の天才」として賛美される存在であり、スコットの『フィーメール・アドヴォケート』では実名をあげてその才能が讃えられ、またサミュエルの絵画「グレート・ブリテンの当代の九女神」でもそのモデルの一人に選ばれていた。「女の天才」にたいするモア自身の言及は、『パーシー』と同時期に出版された『主として若い淑女のために構想されたさまざまな主題にかんする随筆』(1777年)のなかに見いだせる。この著作は、題名のとおりの若くは若い女性にむけて宗教の大切さや正しい振る舞いを説いた教訓的な内容で、そこにはモアが四人の姉妹とともに運営に関わった女子寄宿学校での教育経験が反映されていた。

モアの女性観についてまず指摘できるのは、彼女が男女の能力や特性をはっきりと区別した点である。モアはこの著作の序章で、男女には「自然、特徴、習慣」によってそれぞれにふさわしい領域が定められていると述べ、その上で女性の精神の特性を次のように説明した。

一般的に女性の精神は、学問において男性ほどに高い程度の完成度を達成することができないように見える。しかし……女性は生き生きとした想像力、そして美しいものと不完全なものとを見事に見分けるための、審美眼と名づけられた力をもっている³²⁾。

モアによれば、女性は直感的に物事の美しさや感情に訴えるものをとらえることには優れているが、物事を正しく判断したり論理的に分析したりする力には欠けている。その証拠として、モアは次のような点を指摘する。

私たちは機知に富んだ多くの女性について聞いたことがあるが、女性の論理学者については一人も聞いたことがない。回想録の称賛すべき作者の多くを知っているが、年代学者についてはいちども聞いたことがない。……教えるというより楽しませること、あるいは短い推論で間接的に教えることは……女の天分 (female genius) の特徴のひとつである³³⁾。

モアにとってこの「女の天分」とは、神から授かった自然秩序の一部として、女性が謹んで受け入れるべきものであった。モアは続けて、男女はこのように互いに異なる性格を与えられているからこそ、ともに異性との交際によって利益を得ることができると論じる。男性は女性との会話によってそのマナーを洗練することができ、また女性は男性と関わることでその考え方を確固としたものにできるからである。こうしてモアは「女の天分」を、それ自体としては不足した部分があるが、むしろそうであるからこそ、男性との相互補完的な関係によってその役割を十分に果たしうるものとして高く評価した。こうした議論は、ある面では前節で触れたフォードイスの主張と通じるものがあるだろう。女性は、男性の真似をするよりも女性独自の価値を高めたほうが得るものが多いというわけである。

その一方、モアはこの引用部分の female genius という言葉に注をつけ、その脚注部分では次のように、この言葉を「女の人材」という意味でとらえている。

この国は男性の大部分と同じく女性の批評家・詩人・歴史家・言語学者・哲学者・モラリストを誇りうるが、筆者はこのことが女性の一般的な立場を覆すものになるとは考えていない。これらの特別な実例にほかの事柄が挙げられるかもしれないが、しかし想定されるのは、彼女たちが法則そのものを無効にするのではなく、法則に反する例外としてのみ立ち現れているということだ³⁴⁾。

ここでモアが強調しているのは、男性と同じ分野で活躍する「女の人材」がいたとしても、それは「女性の一般的な立場」とはまったく関係がないということである。この説明は、たとえば前節で見たベネットの議論とあまり違いがないようにも見えるかもしれない。しかしこの言明がハナ・モアという、明らかに突出した文学的才能をもつ女性によって発せられたとすれば、その含意はおのずと異なってくるだろう。つまり、この脚注で暗示されているのは、ほかでもない彼女自身が女性一般とは異なる例外的天才であるという事実である。モアはこの書物を、ブルーストッキング・サークルで知遇を得ていたエリザ

ベス・モンタギュに捧げているが、モンタギュのような女性もまた、この書物の主旨からすれば「法則に反する例外」とならざるをえなかった。このような、一般論のなかに位置づけるのが難しくなるはずの女性の名前をわざわざ冒頭に掲げるという手法には、「女の天才」の名を使ってこの書物を権威づけようとするモアの思惑が透けて見えてくるようである。

このようにモアは、対象に応じて female genius の意味を使い分けた。この書物の読者である普通の女性にたいしては、それを「女の天分」という意味で用い、「自然や習慣や教育」によって与えられた役割を謙虚に受け入れるよう説いたが、その一方で、彼女自身のような例外的な女性について述べるときには、この言葉を「女の天才」という意味で用い、その才能を特権化したのである。こうして female genius を二重の意味で用いることで、モアは女性一般とみずからのあいだに境界線を引き、彼女たちを教え導く存在としての自己像をつくりあげたように見える。それは、「女性であること」の固有な特性を肯定しながら、同時に優れた女性たちの「天才であること」の価値も守るという、巧みな「女の天分／天才」の言説の引き受け方であったといつてよい。

男性的な「天才」という理想——メアリ・ウルストンクラフト

モアの対極に位置づけられるのが、メアリ・ウルストンクラフトである。ウルストンクラフトが1792年に著した『女性の権利の擁護』は、男女の差異を強調したモアの議論とは反対に、男女の平等を要求した書物としてよく知られている。彼女は非国教徒との交際や1789年に勃発したフランス革命から刺激を受けて、この書物のなかで、あらゆる人間は生まれながらに平等な権利をもち、男女の違いは教育や社会通念によってつくられたものに過ぎないと論じ、女子教育の改革を求めた。彼女はとりわけ、男性と異なる女性特有の価値を讃えた従来の女性論を手厳しく批判した。ルソーの教育論『エミール』は、男性を喜ばせることや男性に服従することに女性の価値を定めているとして、ウルストンクラフトの攻撃的となった。またフォーダイスの『若い女性への講話』は、人間としての資質ではなく「女性的な柔和さ」や「不自然な優美さ」のみを女性に教え込んでいるとして論難された。

女性が「女性的」な特性によって誉めそやされるのを見ることは、ウルストンクラフトにとって耐えがたいことだった。前節で取り上げた小説『文通』の男性の手紙に見られたような、「愛すべき」「デリケートな」といった言葉を用いた女性への賛辞は、彼女にしてみれば女性にたいする侮辱と感じられたことだろう。この書物のなかでウルストンクラフトは、歴史家キャサリン・マコーリにたいしてほぼ唯一にして最大の敬意を表しているが、それはマコーリが「女性のか弱さとは相容れないような知的な学識をもった女性の一例」だったからである。ウルストンクラフトによれば、マコーリの「著述の文体には、女性の特徴などは見られず」、また彼女は「利口さよりも洞察力を、空想力よりも理解力を所有して」おり、さらにその「論拠には火のような熱」があったという³⁵⁾。ここで評価さ

れたのは「洞察力」や「理解力」や「熱」など、いずれも明らかに一般的には「女性的」とされない能力や性質であった。

ウルストンクラフトがマコーリの存在によって大きな励ましを得ていたことは間違いないが、しかし『女性の権利の擁護』のなかで「女の天才」という言葉は一度も用いられていない。それはこの言葉に、ウルストンクラフトの理解する天才像とは馴染まないものがあったからだろう。「女性の性格にかんする通説」について論じるなかで、彼女は「天才」とは何かという問題を正面から取り上げ、次のようにその特徴をつかんでいる。

天才 (people of genius) は研究のために、あるいは健康にたいする注意をなおざりにしたために、また、彼らの知性の活力に比例している激しい情熱のために、非常にしばしば自分の身体を損ねてきた。このことから浅薄な観察者たちは、天才 (men of genius) は一般に身体が弱い、あるいはデリケートな体質の持ち主であると推論してきた。しかし私は、事実は反対であろうと信じている。なぜならよく調べてみると、精神の強さは大抵の場合、特に優れた肉体的強さ——生まれつき健全な体質——を伴ってきたことが見いだされるからだ³⁶⁾。

このようにウルストンクラフトは、「天才は一般に身体が弱い、あるいはデリケートな体質の持ち主である」という、当時提唱されていた議論に反対し、天才の条件は身体的な強さにあると主張した。こうした天才の理解には、数年前から彼女が交際していた画家、ヘンリ・フュスリ (Henry Fuseli, 1741-1825) からの影響を指摘することができるだろうが³⁷⁾、ここで問題として浮上するのは、身体的強さと性差のあいだの関係である。彼女はこれに続けて次のように論じる。

私は、男性の肉体的な強さはおのずと女性にたいする優越性を生むもののようにだと認めよう。この肉体的な強さだけが男性の優越性を支えうる唯一の確実な基礎である³⁸⁾。

ウルストンクラフトはこうして、男性の身体的な強さを認めることで、男性のほうが天才にふさわしい存在であることをあっさりとは是認してしまう。しかしこの前提を確認しながら、彼女は次のように続ける。

それでもなお、私は次のことを主張する。すなわち男女の徳だけでなく、知識もまた、たとえ程度においては違っていても、本来同じ性質のものであるべきだと。そして女性は道徳的な人間とみなされることはもちろんのこと、理性的な人間としても考えられるのだから、夢を追う半人前の人間として教育されるのではなく、男性と同じ手段によって人間の徳を獲得する（または完成の域に達する）よう努力しなければならないと³⁹⁾。

こうしてウルストンクラフトは、男女のあいだに身体的な優劣の差があり、したがって「天才」になる可能性にも高低の差があることを認めながらも、同時に女性は「男性と同じ」性質の知識や、「男性と同じ」手段による徳を獲得するべきであると主張する。ここで議論されている「存在」と「当為」のあいだに大きなギャップがあることは明らかだろう。はたして男性と同じ「強い」身体をもたない女性も「天才」になりうるのか。なぜ男性と異なる身体的な前提をもつ女性も「男性と同じ」ように「天才」になるべきなのか。こうした「女の天才」をめぐるアポリアは、ウルストンクラフト自身がどれほど自覚していたかはともかく、『女性の権利の擁護』では提起されたまま解消されることがなかった。

このようにして、「天才」という言葉を多義的に用いたモアとは異なり、その意味を厳密に突き詰めようとしたウルストンクラフトの場合、「女性であること」と「天才であること」を両立させることには大きな困難が伴った。想定されていた天才のモデルは古典的な男性のものであったため、「女性であること」は「天才であること」の障害としてしか認識されざるをえなかったのである。しかし逆にいえばウルストンクラフトは、「女性的」な特性ゆえに安易に「女の天才」を賛美する言説にたいして敵対的な姿勢を取ることで、「天才」の意味の形骸化を食い止めようとしたことにもなる。彼女にとっては、「天才」の絶対的な価値が認められてはじめて「女の天才」を称揚する意義が生まれると考えられた——ひとまずそう理解しておくべきかもしれない。

「男の天才」の相対化——マライア・エッジワース

モアの議論とウルストンクラフトの議論は、保守派と急進派という政治的立場の違いも反映して鋭い対立を見せたが、マライア・エッジワースはこの両者のいずれとも異なる論法で、女性の文学的才能が認められる領域を広げようとした。進歩的な教育論者の父親とその周辺の知識人たちから影響を受けて育ったエッジワースの女性論は、1795年に出版された『文芸に携わる淑女のための手紙』という書簡や随筆を含んだ書物のなかで展開されている。この作品は、男女の完全な平等を求めるウルストンクラフトのような議論とは距離を置きながら、なおかつ女性が男性と同じ領域で活躍することをモアのように否定するのでもなく、女性が知性を伸ばすことの意義を説いた点にその独自性があった。

1798年に発表された第二版の宣伝文に明記されていたように、エッジワースはこの書物で「文学にたいする女性の権利」を主張しようとしたが、しかし「女の天才」という言葉を使って、優れた女性たちを称賛することは避けていた。それに代えて彼女が試みたのは、「天才」賛美という伝統をひとまず留保して、実際の天才が置かれている状況そのものをとらえなおすことである。ある男性による返信書簡のかたちをとった文章では、職業としてもものを書く「天才」が、家族の生活を支えることに躍起になるあまり、自分の能力を消耗している様子が次のように語られている。

多くの職業では、理解力は部分的にしか養われません。……職業を営むために自分の

探究の幅を狭め、自分の力を凝縮させることを余儀なくされるという天才 (men of genius) の不平不満をしばしば耳にします。……そして著述によって生計を立てる文人たちは、自分たちを「文芸職人 (literary artisans)」の状態に貶める出版者の横暴にたいして激しく抗議しています。「文芸職人」とは、精神の特定の能力や力のみを鍛え、ほかの能力は行使せずにいるためにその強さと活力を失ってしまう人びとについて、ある有名な哲学者が与えた総称です⁴⁰⁾。

この「ある有名な哲学者」とは、スコットランド常識学派に属するドゥガルト・ステュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) のことである。ステュアートは『人間精神の哲学の諸要素』の第一巻 (1792年) のなかで、本来であれば総合的な教養をもつべき人間が、ひとたび職業の世界で秀でようとするれば個別の専門の対象のみに関心を狭めてしまうことを指摘して、そうした文人のことを侮蔑的に「文芸職人」と呼んだ⁴¹⁾。ステュアートが指摘するように、「文芸職人」の立場に甘んじている男性文人の状況を見て、エッジワースは当時の社会では「天才」がその創造性を発揮できずにいることを十分に察知していたのだろう。しかし、女性はそれとは異なる。この文章は次のように続いている。

女性は自分たちの理解力にそのような制約を与えられていません。生計を立てる必要もなく、また公的な事柄で脚光を浴びようという野望もなく、自分の精神を急かしたり偏見をもったりすることはありません。家庭生活のなかで、女性には賢くなる余裕があります。／学問や有用な文学において女性の能力があまり発揮されてこなかったと恥じるどころか、私はとても多くのことがなされてきたことに驚いています。自然史について、批評について、道徳哲学について、教育について、彼女たちは優雅さと雄弁さと正確さと創意 (ingenuity) をもってものを書いてきました⁴²⁾。

つまり女性は、幸か不幸か男性のように職業としてもものを書くことを求められていないが、むしろそうであるからこそ、家庭生活のなかで「賢くなる余裕」があるということである。エッジワースはこのような女性の特殊な環境を、「文芸職人」となって細切れの知識を追い求める男性の境遇よりも、ずっと全体的な知性を身につけうるものであると考えた。名声や栄誉を求める男性の「天才」とは異なる立場に置かれているがゆえに、女性のみずからの内面的な知識欲にもとづき、自由に「創意 (ingenuity)」を発揮してものを書くことができる。女性は「天才」を目指さないがゆえに「創意」をもつことができる、というこの逆説的な命題は、実質性を重んじたエッジワースならではの柔軟な発想によるものであったといつてよい。

このように、モアとウルストンクラフトがともに、天才に卓越した能力があるという想定を一部で共有していたのにたいし、エッジワースは天才論そのものを相対化してみせた。エッジワースは「天才」の困難な状況を把握したうえで、女性の立場のメリットに着

目したのである。彼女はその結果、ウルストンクラフトとは異なり、女性の置かれた独自の状況自体に利点を見いだすことができ、また女性の活躍領域を家庭内に定めながらも、モアとは異なり、男性を凌ぐほどまでに女性の関心の幅を広げてとらえることができた。別の言い方をすれば、エッジワースの立場は、「天才」であるか否かという評価とは無関係に、女性がものを書くことの価値を高めようとするものであったということになるだろう。彼女は「天才であること」にこだわるよりも、文学的才能を伸ばそうとする女性たちの熱意を認めることを優先したのである。

おわりに

「女の天才」は、19世紀に入るところになると次第に公的な称揚の対象ではなくなっていった。バタースビーが指摘したように、その一因としては、女性を天才から排除しようとするダフのような議論が影響力を握ったことがあげられよう。ダフは1807年に出版された『女性の知的および道徳的性格にかんする手紙』のなかで、女性は文学的名声を追求めれば、家庭という社会の秩序を破壊してしまい、また女性のデリケートな身体は、創造的なエネルギーを発揮する上で障害になると論じた⁴³⁾。事実、ウルストンクラフトの議論にもその徴候が見られたように、19世紀初頭にはロマン主義的な思潮のもと、「天才」は体力の限界まで想像力を爆発させて「独創性」を生み出すといった、ある種の英雄的存在としてとらえられるようになる。こうした男性的な天才像は、「女の天才」を称揚する言説の基盤を掘り崩すものとなりえたはずである。

しかし「女の天才」が称賛されなくなったことは、女性たちが文学的才能を発揮する場を失ったことを意味しない。出版文化の著しい発展を見たイギリスでは、すでに18世紀後半からマイナーな作品を発表する女性のもの書きが増えており、彼女たちはたとえ「女の天才」としてのお墨付きをもらわなくとも、さまざまなジャンルでたくましく活字の世界に足場を築いていたからである。ただし、それでも彼女たちが「女の天才」という存在に強い憧れを抱いていたことは、フランスのスタール夫人による小説『コリンナ』にたいする反響の大きさからもうかがえる⁴⁴⁾。ダフの女性論が発表されたのと同じ1807年に英語の翻訳が出版されたこの小説には、まさに「女の天才」としてイタリアの大衆からその創造性を熱狂的に支持されるコリンナという魅力的な女性主人公が登場するが、この女性像は19世紀のイギリスの女性作家たちに強い印象を与えたといわれている⁴⁵⁾。

確かにバタースビーが論じたように、概念史として整理すれば、女性は古代から現代まで「天才」から排除され続けたことになるのかもしれない。しかし本稿で見たのは、18世紀後半のイギリスにおいて、「女の天才」が手放しで賛美されたわけでも、また頭ごなしに否定されたわけでもなく、その両極のあいだに、女性が創造力をもつことの意味をめぐる複雑な言説のせめぎあいを展開された様子である。18世紀半ば以降のイギリスでは、「女の天才」が称揚されるべきものであるという前提がつくられると同時に、その存在に

既存の男女の性別秩序を脅かす要素が孕まれていることが認識されたために、この言葉をどうとらえなおすのかという問題が浮上した。そしてそのなかで個々の女性たちもまた、さまざまな方法で既存の問題枠組みをずらしながら、自己表現の回路をつくりだそうとした。創造力の獲得が他者の承認という次元を必要とするがゆえに、18世紀後半にみられた「女の天才」をめぐる言説には、どのような女性がどの程度まで創造性を発揮してよいのかという問題にかんして、他者の同意を引き出そうとする多様な戦略が絡み合うことになったのである。

- 1) 18世紀イギリスにおける「天才」概念の変遷については、濱下昌宏『18世紀イギリス美学史研究』多賀出版、1993年、210～248頁を参照。
- 2) たとえば、Thompson Gale社のデータベース ECCO (Eighteenth Century Collection Online) の「本文検索」の機能を用いると、1750年から1800年までに出版された書物で、本文に female genius という単語を含むものは、重複を合わせて合計203件もヒットする(2008年9月10日時点)。
- 3) Christine Battersby, *Gender and genius: towards a feminist aesthetics*, London: Women's Press, 1989. (『性別と天才——フェミニズム美学のために』小池和子訳、現代書館、1992年。)
- 4) 筆者はかつてこのジャンルの形成を短く跡づけたことがある。次の解説を参照。梅垣千尋「メアリ・ヘイズ『英国・ヨーロッパ女性伝記大事典』について」『復刻版 Mary Hays, *Female Biography* (1803) 別冊解説』、ユーリカ・プレス、2004年。
- 5) George Ballard, *Memoirs of several ladies of Great Britain, who have been celebrated for their writings or skill in the learned languages arts and sciences*. Oxford, 1752, p. vi.
- 6) John Duncombe, *The feminead: or, female genius. A poem*. London, 1757 (first ed. 1754).
- 7) Anon., *Biographium fæmineum. The female worthies: or, memoirs of the most illustrious ladies, of all ages and nations*, London, 1766, vol. 1, p. vii.
- 8) Ibid., pp. vii-viii.
- 9) Mary Scott, *The female advocate; a poem. Occasioned by reading Mr. Duncombe's Feminead*, London. 1774, p. v.
- 10) Ibid., p. vi.
- 11) Ibid., p. 36.
- 12) Antoine Léonard Thomas, *Essay on the character, manners, and genius of women in different ages*. Enlarged from the French of M. Thomas, by Mr. [William] Russell, London, 1773; *An essay on the character, the manners, and the understanding of women*. Translated by Mrs. Kindersley, London, 1781. ここではフランス語の l' esprit が genius や understanding と訳されている。
- 13) Benito Jeronimo Feijóo y Montenegro, *An essay on the learning, genius, and abilities, of the fair-sex: proving them not inferior to man, from a variety of examples, extracted from ancient and modern history*. Translated from the Spanish of El teatro critico. London, 1774.

- 14) *All the works of Epictetus, which are now extant*, translated from the original Greek, by Elizabeth Carter. With an introduction, and notes, by the translator, London, 1758 ; Elizabeth Montagu, *An essay on the writings and genius of Shakespear, compared with the Greek and French dramatic poets. With some remarks upon the misrepresentations of Mons. de Voltaire*, London, 1769.
- 15) Catharine Macaulay, *The history of England from the accession of James I to that of the Brunswick line*, London, 1763-83.
- 16) 筆者は18世紀イギリスにおける女性著述家の活躍について、次のような研究視角の確認をしたことがある。梅垣千尋「イングランド啓蒙と女性——研究視角と問題設定（前編）」『青山学院女子短期大学紀要』第59号、2005年；同「イングランド啓蒙と女性——研究視角と問題設定（後編）」『青山学院女子短期大学紀要』第60号、2006年。
- 17) 「女性的」価値の重視という点について、詳しくは、梅垣千尋「18世紀イングランドにおける啓蒙の多元性——ジェンダーの視点から」『青山学院女子短期大学紀要』第61号、2007年、5～14頁を参照。
- 18) 非国教徒やスコットランド啓蒙の知識人たちの女性観については、梅垣千尋「『女性の権利の擁護』と18世紀末イングランドの理性的非国教徒」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第23号、2003年、45～48頁を参照。
- 19) Scott, *The female advocate*, p. vii.
- 20) John Andrews, *Dialogues concerning the ladies, to which is added, essay on the Antient Amazons*, London, 1785, pp. 150-52.
- 21) Elizabeth Ogilvy Benger, *The female geniad; a poem. Inscribed to Mrs. Crespigny; written at the age of thirteen*, London, 1791.
- 22) 次の英語訳からの翻訳。A Letter from M. Rousseau to M. D'Alembert concerning the effects of theatrical entertainments on the manners of mankind. Translated from the French, London, 1759, pp. 138-139.
- 23) James Fordyce, *Sermons to young women*, London, 1775, vol. 1, pp. 214-215.
- 24) Martin Sherlock, *Letters on several subjects*, London, 1781. vol. 1, pp. 21-23.
- 25) Anon. *The correspondents, an original novel, in a series of letters*, London, 1784. pp. 102-104. (傍点の強調部は原著者によるイタリック表記。)
- 26) Ibid., p. 105.
- 27) Ibid., pp. 105-106. (傍点の強調部は原著者によるイタリック表記。)
- 28) Ibid., p. 106. (傍点の強調部は原著者によるイタリック表記。)
- 29) Ibid., p. 107.
- 30) John Bennett, *Strictures on female education; chiefly as it relates to the culture of the heart*, London, [1787], pp. 48-49. (傍点の強調部は原著者によるイタリック表記。)
- 31) Benger, *The female geniad*, Preface.
- 32) Hannah More, *Essays on various subjects, principally designed for young ladies*, London, 1777, p. 6.
- 33) Ibid., pp. 11-12.
- 34) Ibid., p. 12. (傍点の強調部は原著者による大文字表記。)
- 35) Sylvana Tomaselli (ed.), Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Men and*

- A Vindication of the Rights of Woman*, Cambridge : Cambridge University Press, 1995, p. 188. (『女性の権利の擁護』白井堯子訳、未來社、1980年、202頁。)
- 36) Ibid., p. 109. (邦訳、79頁。)
- 37) ウルストンクラフトの夫であるウィリアム・ゴドウィンによれば、フュースリはルソーから影響を受け、また「天才の神性」を好んで主張したという。次の伝記を参照。Richard Holmes (ed.), Mary Wollstonecraft, *A Short Residence in Sweden, Norway and Denmark and William Godwin, Memoirs of the Author of 'The Rights of Woman'*, London : Penguin Books, 1987, pp. 233-234. (『メアリ・ウルストンクラフトの思い出』白井厚・堯子訳、未來社、1970年、76～77頁。)
- 38) Tomaselli (ed.), Mary Wollstonecraft, *A Vindication*, p. 110. (邦訳、80頁。)
- 39) Ibid., p. 110. (邦訳、80頁。傍点の強調部は原著者によるイタリック表記。)
- 40) Claire Connolly (ed.), Maria Edgeworth, *Letters for literary ladies*, London : Everyman, 1993, p. 27.
- 41) Dugald Stewart, *Elements of philosophy of the human mind*, Vol. 1, London, 1792, pp. 21-22.
- 42) Connolly (ed.), Maria Edgeworth, *Letters*, p. 127.
- 43) William Duff, *Letters on the intellectual and moral character of women*, London, 1807.
- 44) 19世紀初頭のほぼ無名の女性著述家たちが『コリンナ』に刺激を受けていたことについては、次のものを参照。Leonore Davidoff and Catherine Hall, *Family Fortunes : Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*, Revised edition, London : Routledge, 2002, pp. 160-162.
- 45) Madame de Staël, *Corinna, or Italy*, translated by D. Lawler, London, 1807. (『コリンナ——美しきイタリアの物語』佐藤夏生訳、国書刊行会、1997年。)『コリンナ』における「女天才」の表象とその絵画との関係については、次のものを参照。Lucy Peltz, “Living Muses : Constructing and Celebrating the Professional Woman in Literature and Arts”, in Elizabeth Eger and Lucy Peltz, *Brilliant Women : 18th-Century Bluestockings*, London : National Portrait Gallery, 2008, pp. 84-89.